

Dr. ハイネ



日差しが眩しい。ブラインドを降ろしたい。

ハイネの首から若干の汗がにじみ出ている。看護師ロボが気づいて、率先して降ろしてくれるのを期待するが、受付対応に追われていて、期待できそうにない。人と同じ姿の看護師ロボットは、多少値が張ったが、メカメカしいロボットだと患者が警戒するので、半ば諦め気味に購入したものだ。

ポンコツめ。看護師ロボは、かれこれ十年以上前に雇ったが、こっちの思い通りに動いてくれた試しがない。青信号になったら渡れ、と言えば、あれは緑ですが、と答える。不良品かもしれない。

目前に座っている患者は、椅子に座ってから五分、まったく喋らない。その悲壮な雰囲気から、医者であるハイネ自身も気負いして動けずにいた。

じっと動かない患者の椅子の下に、紙くずが落ちている。ポンコツめ、椅子の下の掃除を怠ったな。あれほど隅から隅まで掃除しろと言っているのに、うちのロボットはわざと仕事を一割ほど怠っている気がする。

辛抱たまらん、ブラインドを降ろすために立ち上がろうとした矢先、患者は、ようやく言葉を発した。

「私、ロボットかもしれません」

ハイネは、あなたの全てを理解しておりますという顔で微笑みかけた。

「お仕事大変なのですか？」

ハイネが語りかけると、先程まで俯いていた患者は、身を乗り出す勢いでハイネの方を見た。すぐにまた俯くと、か弱く「はい」と言い、仕事場の話始めた。

「私、工場勤務なんです」

患者は淡々と話す。抑揚のないしゃべり口調に、抑圧された感情が見え隠れする。

「最近、人型ロボットの導入が行われてて、職場に大量に入ってきたんです。最初は、皆。皆ってのは、私達従業員の事です。皆、人型ロボットが入ってきて、人間はクビになるんじゃないかと、怯えていました。ただ、今、人は簡単にクビに出来ないじゃないですか。特にロボットのせいでクビにしたと世間が知ったら、バッシングされるらしくて。そのせいか分かりませんが、皆、そのまま働けることになったんです。最初は皆安心して働いていたのですが……」

患者は鼻をすすった。目元が赤く滲んでいる。

「ロボットがどんどん入ってきて、段々、人間がいる居場所がなくなってきたんです。それで居づらくなって、皆どんどん辞めて行って。まだ数人いますが、私のいる部屋は、もう私しかなくて。私以外、全員ロボットなんですよ！」

ハイネは患者の言葉に合わせて、自分の胸にナイフ刺されたような苦痛の表情を浮かべた。

「それはさぞかしお辛いでしょう」ハイネは患者のつむじに語りかけた。

「仕事自体は楽なんです。私、人と喋るの苦手なんで、工場で働くしかないんです。だから他の人みたいに転職できないんです」

ただ、最近は頭がおかしくなりそうなんです。患者の膝の上の指先が震えている。

「ロボットに囲まれて毎日を過ごしていると、なんだか私はロボットになった気がしてくるんですよ。わかります？いくら人と話すのが苦痛でも、人よりロボットと話す時間が多いと、もう自分が分からなくなってくるんですよ」

ハイネは昔見た映画を思い出していた。ずいぶん前に見た、さらにずいぶん前の映画なので、記憶は曖昧だ。確か工場の流れ作業を行っている主人公が、同じ作業の繰り返しで頭がおかしくなる話だったと思う。あれは、最後どうなったのだろうか？頭がおかしくなった主人公は、流れ作業と同じ手つきで工場の機械をめちゃくちゃに壊したような気がする。

ハイネは、自分の連想は患者を頭がおかしくなったと言っているのと同義だと気づき、反省した。

「先生、私、未だ自分のことを人間だと分かっていますが、このままだと、自分はロボットだと思いで怖いんです。いえ、もう思い始めています」

ハイネは患者に向けて大きく頷き、静かに語りかけた。

「大変でしたね。大丈夫ですよ。最近、ロボットの関係で来られる方が多いんです」

今度は、あなたは一人じゃないですよという顔で微笑む。

「最近のロボットは実に精密にできていますね。見た目だけでは人と見分けつきません。不安に思うのも仕方ありません」

ハイネは慣れた手つきでカルテに「S」と書いた。

「大丈夫、人とロボットの違いは、たくさんあります。中身が全然違うんですよ。レントゲンを撮れば一瞬で分かります」

ハイネは胸を張って言った。こういう時に医者が弱々しく話すと、患者の不安を取り除くことはできない。

予想に反して患者は、眉毛を八の字にして呟いた。

「先生、僕、知ってるんです。身体の中も人間そっくりのロボットを。工場長が自慢気に言ってたんです。去年導入したロボットは最新のモデルだと」

ハイネは胸の中で舌打ちをした。笑顔のまま患者に「アラ、最新モデルを所持してるんですか！」と驚くふりをした。

正式にはロボットではないらしいが、そんなこと問題じゃない。

これでは今までのやり方が通用しない。

では、他の方法を行いましょう。なァに、大丈夫、たくさんありますから。とハイネは言ったが、他の方法なんて備えていない。

ハイネは首を下げて頭を掻いた。患者の椅子の下のゴミが目につく。あれは、たしか。

「では、こうしましょう」

ハイネはさっと立ち上がり、棚から細い青と赤の紙とビーカーを取り出した。

「それは……たしかリトマス紙ですよ」

「はい、リトマス紙です。ご存知ですよ。酸性のものを浸すと赤くなり、アルカリ性のものを浸すと青くなります。さあて、人の血はどっちだと思いますか？」

患者は首を傾げた。

「人の血は弱アルカリ性です。赤いリトマス紙に付ければ、青くなります。わずかにね」

ハイネは机から拳くらいの箱とカッターを取り出した。

「そして、これはうちの看護師ロボットのバッテリーです」

箱を開けて中から筒を取り出した。

「大げさなサイズですが、中身は大きな電池です。どんな精巧なロボットも、形はどうあれ、この電池と同じものを使用してます。人間と同じように血液として体内を液体が巡るロボットも、結局はこれと同じものを使っているのです」

ハイネはカッターで筒に穴を開けた。ビーカーに液体を注ぎ、机に置いた。

「もうお分かりですね。このリトマス紙にあなたの血液を浸します。赤いリトマス紙が青くなれば、あなたは人間です」

「よくもまあ、あんなハツタリが思いつきますね」

看護師ロボットは机の下を掃除しながら言った。掃除を怠った罰として、掃除し直させている。ハイネは洗ったビーカーとリトマス紙を棚に戻していた。

「まったく。さっきのような患者が来る度にリトマス紙を使っていたら、そのうち、赤字になるよ」

「元からうちは酸性ですよ」

「リトマス紙の赤はピンクだよ」

看護師ロボットは机の下からのそのそ出てきた。

「不思議ですね、人間は」

「緑を青と言ったり、ピンクを赤と言ったり」

狭いところから出てきて、肩が凝りましたと言わんばかりに腕を伸ばす看護師ロボットを見て、お前らも体が凝るのかと言うと「歯車の噛み合わせがね」と看護師ロボットは言った。肩を回す看護師の姿があまりに人間臭く、ハイネは思わず笑ってしまった。

「なあ、お前は自分が人間かもしれないって疑うことはないのか」

ハイネは看護師ロボットに言った。

「考えもしませんでしたね」看護師ロボットは反対側の腕を回しながら受付の椅子に座った。

「あ、でも、自分はロボットだってことを忘れることはあります」

ハイネは首を傾げた。

「それは、人間だと思いきむのと同義じゃないか」ハイネの困った顔に、看護師ロボットは少しだけ笑った。

「昔、ロボット三原則なるものがあつたでしょう。ロボットってのは人を助ける存在で、人を危険に陥れてはいけないって。でも、今はもうあやふやじゃないですか。ロボットが人と同じように働くってことは、人の雇用を奪ってるとも言えるし。それって命を奪っているのと大差ないでしょ」看護師ロボットは資料に視線を戻して続けた。

「人を助けるのがロボットなら、私は今、何をしていますのでしょうかね」

「お前は、十分、人を助けているだろう。患者も、俺も」

「仕事だからやっているんですよ」そう言うと、看護師ロボットは受付に向き直した。その背中の哀愁が非常に人間臭く「なあ、お前の人工血液を検査してもいいか」とハイネは聞いた。看護師は振り返らずに笑った。

室内はすっかり綺麗になり、午後から一層頑張ろうとやる気を出したが、午後一番の患者はどう見ても先の患者と同じ悲壮感を漂わせており、眉を八の字にしていた。どこも悪そうに見えない。

「私、ロボットかもしれません」

ピーカーを洗っておいてよかった。よもや、こんなに早くも使用することになるとは。先程バッテリーから取り出した液体も、患者がリトマス紙の結果を疑う時に使おうと取っておいている。何も問題はない。

ハイネは、私はあなたの味方ですという笑顔で、患者に微笑みかけた。

新たな患者の悩みは、先の患者とほとんど一緒だった。自分の働く工場は、ほとんどロボットによって稼動しており、一緒に働くうちに自分をロボットだと思いそうで怖い。というものだ。もしかしたら、先の患者と同じ工場かもしれない。こんな事態がそこらかしこで起こって、私の病院に駆け込まれたら、リトマス紙が足りなくなる。

徐ろにリトマス紙を取り出して、ハイネは先程と同じ説明を患者に話した。

青が赤に変わればロボットで、赤が青に変われば人間。たったそれだけのことだ。

「青が赤になったらロボットなんですよね」患者は小さく言った。

ハイネは答えなかった。

「赤く、なってますね」

ハイネが垂らした患者の血が青リトマス紙に付着した途端、リトマス紙は赤く染まった。患者の血が特別に鮮烈な赤で青リトマス紙が真っ赤に染まったのかと一瞬、現実逃避をしたが、紙に付着した血はむしろドス黒い赤になるはずで、リトマス紙は、看護師ロボットの言う「ピンク」寄りの赤い色に染まっていた。

「あれ、先程、私何と申し上げましたか」

ハイネは努めて笑顔で言った。

「誤解されるような言い方で申し訳ありません。青が赤くなれば人間なのです」

そう言うしかなかった。

自分はロボットかもしれないなどと、人間のフリしてやってきたモノに、ロボットですわと答えたら、どんな乱暴をされるか分かったものじゃない。

納得してくれ。ハイネは胸の内を祈願したが、患者は眉間に皺を寄せ、足を揺すりながら、声を荒げ始めた。

「なあ、ほんとは、ロボットの反応が出たんじゃないのか？俺に何か隠しているだろ？」

おい、どうなんだ。首元を掴まれる勢いで患者はまくし立てた。

十中八九、この患者はロボットだ。人間を人間と証明する準備はしていたが、ロボットに人間



だと思わせる手段なぞ用意していない。

「やっぱり俺はロボットなんだろ」貧乏揺すりが一層増した。患者は項垂れて両手で頭を掻いた。

はい、そうです。そう言いたい。しかし、この勢いでは、ロボットですと言うことに危険しか感じない。ハイネは努めてあなたは人間ですよと、患者に話しかけた。

患者はハイネの方を見て立ち上がった。

手にはいつの間にか、ナイフを持っている。

「あんたもこの検査してみろよ」

患者の顔は笑っていない。

「青が赤になれば人間なんだろ？あんたの血でも赤になるはずだ」

ハイネは患者の提案に一瞬、体を硬直させたが、笑顔のまま「いいですよ」と言った。

「ただし、自分の血を自分で抜くというのは難しいものです。看護師ロボットに手伝わせませす。」

看護師ロボットを呼ぶために受付に向かったハイネは、看護師ロボットと新しい採血道具を持ってきた。

看護師ロボットはハイネの左手にバンドを巻いて、静脈を探した。ここだという場所を見つけ、消毒液を付けた脱脂綿を塗る。その手際の良さはさすがロボットだと心のなかで感心した。

「なんだ、先生は本当のことを言っていたんですね」

赤くなった青リトマス紙を見て、患者は安堵の表情を浮かべた。先程の喧騒がすっかり鳴りを潜め、患者はにこやかに帰っていった。

「いやあ、上手くいったな」ハイネはため息をついて看護師ロボットに言った。

「俺を採血しつつ、さっきふざけて採ったお前の人工血液を青リトマス紙に付ける。我ながら咄嗟に良い作戦を思いついた」

「私の手際の良さのおかげですよ」看護師ロボットはそう言うとポケットから血液の入った容器を取り出して、ハイネに渡した。

「自分で言うな」

ハイネは笑った。確かにその通りだ。採血終了間際に一瞬だけ看護師ロボットが患者とハイネの間に入り、患者の死角で血の入った容器をすり替えたのだ。患者が見た青リトマス紙の反応は、看護師ロボットの人工血液のものだ。

看護師ロボットはポンコツじゃないな。ハイネは受付に戻って業務を再開した看護師ロボットを見て、考えを改めた。ロボットだからこそ人には出来ないこともあるし、逆も然りだ。人とロボットはお互いの欠点を補い、長所を出し合ってより良い社会を目指すべきだ。

ハイネは興奮のあまり、柄にもないことを思ったと、内心照れてしまった。口には出していないので、誰かに聞かれているわけでもないが、照れ隠しで自分の血液をリトマス紙に垂らした。

青リトマス紙が赤くなった。

一瞬、どきりとしたが、うっかり看護師ロボットの人工血液を垂らしてしまったようだ。机の

上に、もう一つの容器が転がっている。

こういうケアレスミスが人間の欠点だな。ハイネは苦笑し、二つの容器を、使用済みの道具を入れるカゴに置いた。